

第29回 ('18)

書学書道史学会大会

於：岐阜女子大学文化情報研究センター（杉山ビル）

10/27 sat.

13:00~ 受付開始
 13:30~14:30 開会式・総会
 研究発表
 14:40~15:10 ①中村 伸夫
 15:10~15:40 ②鍋島 稲子
 研究推進のためのクロストーク
 16:00~17:45 澤田 雅弘
 蘇 浩 林 司洋
 関 俊史 剣持 翔伍
 懇親会
 18:00~19:30

10/28 sun.

09:00~ 受付開始
 研究発表
 09:30~10:00 ③南條 佳代
 10:00~10:30 ④谷口 成孝
 10:30~11:00 ⑤金 貴粉
 11:00~11:10 休 憩
 11:10~11:40 ⑥早川 桂央
 11:40~12:10 ⑦成田 健太郎・中村 覚
 12:10~13:20 記念撮影・昼食
 講演会
 13:20~14:50 富谷 至 氏
 15:00~15:10 閉会式



本年度大会会場の岐阜女子大学文化情報研究センターへのアクセスは、下記のとおりです。

アクセスマップ



住所：〒500-8813 TEL：058-267-5237
 岐阜県岐阜市明徳町10番地 杉山ビル

交通のご案内

- JR名古屋駅よりJR岐阜駅まで快速列車で約20分、または、名鉄名古屋駅より名鉄岐阜駅まで約30分
- JR岐阜駅から金華橋通りを北へ約1500メートル
 - ・徒歩 約20分
 - ・岐阜バス 約10分
 JR岐阜バスターミナル、または名鉄岐阜バスのりばから、金華橋方面もしくは長良橋方面行きバスに乗り、
 - (1) [金華橋方面]行は『市庁舎西口』下車徒歩約1分
 - (2) [長良橋方面]行は『市役所南庁舎』下車徒歩約3分
 お車でお越しの方は、杉山町駐車場をご利用ください。

杉山町駐車場のご案内

「文化情報研究センター」より徒歩3分。
 ※杉山町駐車場所地：岐阜市杉山町12(TEL. 058-264-6133)

- 当印刷物は、大会当日にお持ちください。
- カラー版は、ホームページで確認できます。
- 大会用ポスターのデータをホームページにアップします。必要に応じてプリントアウトし、関係各所にご掲示ください。

大会関係各種連絡事項

- 大会参加申込みは、必ず同封の「大会出欠確認はがき」に必要事項をご記入の上、10月17日(水)必着でご投函をお願いします。
- 理事・監事・諮問委員各位においては、必ず同封の「大会出欠確認はがき」にて理事会出欠のご回答をお願いします。幹事各位においても、同様に資料封入作業の出欠のご回答をお願いします。いずれも、昼食準備数を把握する関係上、ご回答にご協力ください。
- 幹事各位には、資料封入作業のほか、受付や大会運営のご協力をお願いしていますので、ご承知おきください。
- 大会参加費(資料代含む)・懇親会費・28日(日)昼食弁当費は、同封の「払込取扱票」に☑し、10月17日(水)までに納入してください。念のため、振込控えは大会当日にお持ちください。
- 本学会大会では、会員の方が非会員の同伴参加を認めています。「大会出欠確認はがき」および「払込取扱票」にその旨(氏名・人数等)を明記の上、「払込取扱票」にて会員ご自身と同伴非会員との額を合算してお振込みください。ただし、会員1名につき、同伴非会員1名が無料です。
- 大会参加費は、会員 2,000円、学生会員 無料です。ただし、会員1名につき、同伴非会員1名が無料で、それを超える場合、同伴非会員一般は1名につき 3,000円、同伴非会員学生は1名につき 1,000円の大会参加費が必要です。
- 懇親会参加費は、会員 5,000円(同伴非会員一般も同額)、学生会員 2,500円(同伴非会員学生も同額)です。
- 28日(日)の昼食弁当費は、一律 1,000円(飲物付き)です。事前申込み以外、大会会場での追加注文の受け付けはできませんので、注文希望の方は必ず「大会出欠確認はがき」にてお申込みください。
- 講演会およびクロストークは、事前の申込みが不要で聴講無料です。非会員や学生にもお知らせ、お勧めいただければと思います。

	大会参加	懇親会参加	28日昼食弁当	計
一般会員	○	○	○	8,000円
	○	○	×	7,000円
	○	×	○	3,000円
	○	×	×	2,000円
学生会員	○	○	○	3,500円
	○	○	×	2,500円
	○	×	○	1,000円
	○	×	×	0円

- 年会費未納の方は、「払込取扱票」に記載の未納分を合算して速やかにお振込みください。
- 懇親会は、大会初日の27日(土) 18:00より、岐阜キャッスルイン 1階レストランで行います。
- 28日(日)の昼食については、事前申込みの弁当をご利用いただくか、昼食をご持参ください。
- 宿泊ホテル等については、すでに会報でお知らせしたとおり、役員・会員ともに事務局では一切手配しません。
- 大会当日の緊急連絡先は、事務局長・高城の携帯(090-9684-9782)とします。

第29回(' 18) 書学書道史学会大会プログラム

今年度の大会は、10月27日(土)・28日(日)の両日、岐阜女子大学文化情報研究センター(杉山ビル)において開催します。日程の詳細が決まりましたので、ご案内申し上げます。研究発表に加え、講演会およびクロストークを企画いたしました。多数のご参加をお待ちしております。

〈日 程〉

(会場はいずれも岐阜女子大学文化情報研究センター内)

【10月27日(土) 第1日目】

11:00~12:50 理事会(6階和室)

13:00~ 受付開始(6階大会議室前)

13:30~14:30 開会式・総会(6階大会議室)

14:40~15:40 研究発表(6階大会議室)

①14:40~15:10 「中国における極小の書に関する一考察

—清人二十六家による蠅頭書冊〈耆儒澄鑑〉を例として—

中村伸夫(筑波大学)【司会:大野修作】

②15:10~15:40 「唐時代における王羲之崇拜と逸格派の書について」

鍋島稲子(台東区立書道博物館)【司会:富田 淳】

16:00~17:45 研究推進のためのクロストーク(6階大会議室) ※聴講無料

「若手の研究推進をテーマに」

司会:澤田雅弘(大東文化大学)

パネラー:蘇 浩(関西大学大学院生)

林 司洋(筑波大学大学院生)

関 俊史(早稲田大学大学院生)

剣持翔伍(筑波大学大学院生)

18:00~19:30 懇親会(岐阜キャスルイン TEL:058-262-3339)

【10月28日(日) 第2日目】

09:00~ 受付開始(6階大会議室前)

09:30~12:10 研究発表(6階大会議室)

③09:30~10:00 「『栄花物語』にみる書道観と時代性」

南條佳代(佛教大学)【司会:笠嶋忠幸】

④10:00~10:30 「出雲路敬通の書に関する基礎研究」

谷口成孝(大東文化大学大学院生)【司会:高城弘一】

⑤10:30~11:00 「近代朝鮮における書の専門化過程とその特徴 —官僚出身書人の動向を中心に—」

金貴粉(国立ハンセン病資料館)【司会:柿木原くみ】

11:00~11:10 休憩

⑥11:10~11:40 「開母廟石闕銘の避諱に関する一考察」

早川桂央(保善高等学校)【司会:河内利治】

⑦11:40~12:10 「法帖画像アーカイブを研究資源として活用するために」

成田健太郎(埼玉大学)・中村覚(東京大学)【司会:菅野智明】

12:10~13:20 記念撮影・昼食

13:20~14:50 講演会(6階大会議室) ※聴講無料

「中国における書芸術の誕生」

富谷至氏(京都大学名誉教授)

15:00~15:10 閉会式(6階大会議室)

発表とその他の連絡事項

- 発表者の持ち時間は、30分(発表時間20分、質疑応答10分)です。発表に際しては、時間厳守でお願いします。
- 発表者各位においては、**発表資料は、A3版両面印刷最大5枚まで(複数枚の場合は綴じること)として200部をご作成いただき、10月24日(水)までに、下記の宛先へ送付をお願いします。**
〒500-8813 岐阜県岐阜市明徳町10番地 杉山ビル
岐阜女子大学 文化情報研究センター
☎058-267-5237
※送付伝票備考欄に「書学書道史学会研究発表資料在中」と記載してください。
- 発表会場にはプロジェクターが設置されています。ご利用の場合、当日、USBメモリー等をご準備ください。試写は、研究発表前の空き時間を適宜ご活用ください。なお、プロジェクターを使用される方は、資料送付の際に、その旨をお知らせください。
- 各発表の司会者は、専門分野を考慮の上、振り当てました。ただし、諸般の事情により、司会者に変更が生じる場合があります。
- 理事・監事・諮問委員の方は、10月27日(土)11:00より「第66回定例理事会」を開催いたしますので、理事会開催会場の「和室」(6階)へご参集ください。**
- 幹事の方は、10月27日(土)10:30に事務作業を行う「小会議室」(6階)へご参集ください。**

①中国における極小の書に関する一考察

—清人二十六家による蠅頭書冊〈耆儒澄鑑〉を例として—

中村 伸夫

「蝸角の虚名、蠅頭の微利」（蘇東坡）という詞句がある。うわべだけの名譽をカタツムリの角、きわめて小さな利益をハエの頭にたとえたものである。「蠅頭」は利益の微細をいうのみならず、微小なものをたとえる言葉として用いられ、書についても、「蠅頭の細字書」（陸游詩句）、「蠅頭の細字」（元好問詩句）などの用例がある。

総じて「大なること」を好んだ中国人は、その一方で、たとえば絵画の制作においても、極小の画面の中に、大自然の真態を精密に再現することに執念を燃やした。文字の場合も、古くは〈周原甲骨〉や〈連雲港尹湾出土漢代簡牘〉などから、清代の硯や墨盒の刻銘、そして鼻烟壺の内書の文字に至るまで、信じたがいほどの精巧な描写技術を駆使した極小の表現が見られる。臨模については、葉昌熾の『語石』卷十・縮臨本一則に、「賈秋壑の玉枕蘭亭は縮臨の濫觴と為す。」とあるように、名跡を縮小することは南宋の〈玉枕蘭亭〉を始まりとする。そして「字の小なるは豆の如きも、鬚眉は畢く現わる」（同上）とある錢泳による漢碑の縮臨をはじめ、清代には袖珍本・巾箱本のための碑版法帖の縮小臨書や縮小模刻がひろく行われた。

蠅頭の頭ほどに小さな楷書を善くした人物として、錢泳の『履園叢話』には、晩年の翁方綱や余集の例を挙げている。本発表では、そのことを証明する遺品でもある翁方綱、余集、伊秉綬、王芑孫など清代乾嘉期の官僚二十六家による蠅頭書冊〈耆儒澄鑑〉を例として、中国における極小の書に関する初歩的な考察結果について発表する。

極小の文字を、驚愕の精密度をもって書き記す、あるいは再現するという行為は、やはりそれ自体、大きく優れた行為であるということ、観る者に強く示そうとした反語的行為ではなかったか、というのが発表の主旨である。

（筑波大学）

第29回 (' 18) 書学書道史学会大会レジュメ 【10月27日 (土) 】 ②15 : 10~15 : 40 発表 : 鍋島稲子 / 司会 : 富田淳

②唐時代における王羲之崇拝と逸格派の書について

鍋島 稲子

唐時代の書を、①建国から第八代皇帝睿宗まで(六一八〜七二二)、②第九代皇帝玄宗の開元から第十七代皇帝文宗の甘露の変まで(七一三〜八三三)、③その翌年から第二十三代のラストエンペラー哀帝まで(八三六〜九〇七)に分けたとき、①における太宗(在位六二六〜六四九)と、②における玄宗(在位七一二〜七五六)が唐時代の書法史に与えた影響は極めて大きい。太宗は「貞観の治」と称えられる在位中に、たびたび内府所蔵の書跡を整理・鑑定させ、能書の臣下や馮承素らに王羲之の書を臨摸させて、臨本や摸本、拓本を重臣に賜った。蘭亭序を臨摸した能書にも多くの名が伝えられていることから、当時の蘭亭熱を推測することができる。

貞観十六年(六四二)には、王羲之、王献之、張芝、張昶らの真跡百五十巻を集賢院に下げ渡し、集字・搨摸させた。王羲之の集字は、この時すでに行われていたのであろう。太宗の聖教序が下賜されたのは貞観二十二年(六四八)、懷仁が王羲之の行書を集めた石碑「集王聖教序」を完成させたのは太宗没後の咸亨三年(六七二)であった。世は王羲之の書を崇拝しても、民間には王羲之の書が皆無となっていただけに、この碑が世にでるとその書は一世を風靡しただけでなく、集王碑の制作そのものも大いに流行することとなった。「集王聖教序」から大和六年(八三二)の「金剛經」までに十四種ほどの集王碑が作られており、太宗による王羲之崇拝の伝統は文宗まで受け継がれたことになる。

太宗が導いた書の流れが脈々と継承される一方で、新たな書風が生まれるのは、玄宗の出現によつてであった。玄宗が隸書に盛り込んだ気宇の大きさや豊麗な気分は、その他の書体にも影響し、従来の書風を一変させることになった。この時期の書風の変化を端的に示す一例は、賀知章や張旭によつて創出され、懷素がこれを継承した狂草においてであろう。

太宗、玄宗ともに、さまざまな側面から唐時代の書を導いた。本論では太宗の王羲之崇拝と、玄宗の隸書愛好を背景に流行した逸格派の書をとらえ、若干の考察を加えたい。

(台東区立書道博物館)

第29回 (' 18) 書学書道史学会大会レジュメ 【10月28日 (日) 】 ③09 : 30~10 : 00 発表 : 南條佳代 / 司会 : 笠嶋忠幸

③『栄花物語』にみる書道観と時代性

南條 佳代

平安期の文学作品において、書道がどのように扱われていたのかを作品ごとに検証していく中で、今回は、その藤原道長の物語として名高い『栄花物語』について見ていく。

『栄花物語』巻三十六 根あはせにおいて、「金の硯、瑠璃の硯の瓶、筆墨まで、いみじう尽くしたり。」といった内裏歌合せにおける冊子の装丁をはじめ筆墨硯紙の様子や「さばかり塗るかためかきたる絵に、つゆも墨がれせずかきかためたまへる、あさましうめでたし。」という書きぶり、書風にいたるまで書に関する多くの記述がなされている。書に造詣が深い道長だからこの書に対する考え方、書道観として、この時代の書風や様子を著しているであろう。

その藤原政権のもとで、さまざまな文化が隆盛となり、和歌や物語を始めとする平安文学が大きく花開いたのである。その和歌や物語を書き著す「かな文字」もこの時代に多く書かれるようになり、拙著「平安文学におけるかな書道『源氏物語』『枕草子』『紫式部日記』にみる書道観と時代性」で論じたように、この時代は藤原道長の庇護のもとに紫式部や清少納言も『源氏物語』や『枕草子』を著すことが出来たのである。

では、藤原道長を描いた『栄花物語』での書の扱われ方は、実際にこの物語が書かれた平安時代の書と、どういった関わりがあるのだろうか。『源氏物語』『枕草子』『紫式部日記』が書かれた頃は、「秋萩帖」「虚空菩薩念誦次第紙背仮名消息」「北山抄紙背仮名消息」「三宝感応要録紙背仮名消息」「綾地賀歌切」「延喜式紙背仮名消息」などの書が書かれたと思われるが、今回も本発表において、紙(料紙)や消息文、書風の分析を加えながら検証していきたい。このような文化的、時代的な観点も踏まえて、藤原道長の書の捉え方、またこの時代の書の扱われ方について考察し、明確にしていくものである。

(佛教大学)

④ 出雲路敬通の書に関する基礎研究

谷口 成孝

明治維新以降の京都の書は、大正二年の平安同好会の発足を機に、知識人や学者らによる研究や見識に基づいた書作が行われ、全国的に風靡していた「粘葉本和漢朗詠集」の風とは違う形で書文化が形成された。

出雲路敬通（一八七八―一九三九）は、当時の京都を代表する書家であり、また「上代仮名展覧会」の図録『落葉集』（博文堂、大正十四年）や、『浪華帖道風消息』（鳩居堂、昭和十年）、『京都美術青年会誌』第十七号（京都美術倶楽部、昭和十四年）などで仮名の解説を行うなど、内藤湖南や山本行範らと共に学術面でも影響を与えたことで知られる。特に『落葉集』においては、平安古筆が公に紹介されたものとしては初期のものであり、敬通の書法観が古筆への評価規準の一つになっていることも推察されるが、日本書道史研究においてその対象となる機会は少なく、遺墨集『とりのあと』（便利堂、昭和五十四年）を除き、先行研究もほぼ皆無といえる。

今回、これまで紹介されることのなかった出雲路家の資料を調査することができた。本発表ではその内容を紹介するとともに、前掲の解説書や作品集からうかがえる、古筆を中心とした書への視座について検討し、書道史上の位置付けを図る端緒としたい。

敬通の解説文には、品位の高さや筆力という観点に加え、線に対する印象を「神韻を想う」「襟を正す」などの言葉で著した箇所が看取される。これは古の筆跡に対し、大きな敬意をもつて鑑賞にあたっていることの証左であり、京都下御霊神社の神職を家業としながら、有職故実の研究者として形成された価値観も影響しているものと思われる。「高野切第二種」や「寸松庵色紙」を意識したとされる作風と合わせ、根底に存在する復古意識、そして中野越南や日比野五鳳ら、京都の書人への影響についても触れることとしたい。

(大東文化大学院生)

⑤ 近代朝鮮における書の專業化過程とその特徴

—官僚出身書人の動向を中心に—

金 貴粉

朝鮮王朝時代末期から植民地期に至るまで、旧来の官僚たちと書の関係は政治状況の変化とともに大きく変化した。一八九四年には実質的に図書署や写字庁は廃止され、能書を官途の要件としてきた従来の觀念に転換を強いることになった。また、官僚出身者には能書家も多く、その一部は政治的な背景から海外との交渉を活発化させる中で、書の交流を盛んにし、自身の進むべき方向を探っていた。

植民地期に入ると、展覧会制度の導入や印刷技術の向上、書画売買システムの確立など、書を取りまく様相も近代化されたが、李龜烈氏は「一九三〇年代までを見ても今日のような職業書家は植民地期において、ほとんど存在していなかった」と指摘している（李（龜）一九八一年）。これに対し、李東・士大夫に代わって職業書家が登場した点を指摘するが（李（東）二〇一四年）、その詳細な動向については言及されていない。報告者は作家活動を中心とする現代的意味における職業書家ではなかったにせよ、植民地期には鑑識家や研究者等の立場で書を生業とする職業書家に近い者が存在し、その嚆矢は植民地期以前において政治的な活動も伴う官僚出身者を中心とする書人の活動の中に認められるのではないかと考える。

以上により本報告は、代表的な官僚出身の書人である金玉均（一八五一―一八九四）、吳世昌（一八六四―一九五三）、金圭鎮（一八六八―一九三三）を中心に、彼等が近代朝鮮において、どのように書を專業化させていき、そこにいかなる特徴が認められるかについて当時の書画を取り巻く時代状況についても視野に入れ、考察する。

(国立ハンセン病資料館)

⑥開母廟石闕銘の避諱に関する一考察

早川 桂央

「避諱」とは古代社会に発生した習俗である。古代中国に於いての避諱は、尊者の諱を直接表すのを避け、同義同訓の別字を代わりに用いたり、また対象の字の最終画を闕筆させたりする筆記のタブー、或いは対象の文字を発言することを禁じる発話のタブーを言い、広義的に言えば言葉に関するタブーを意味する。また避諱は主として皇帝を頂点とする階級制度の確立や保持、或いは皇帝の持つ権力を強化せんことを目的に使用される旨が、陳垣『史諱举例』王健『避諱辞典』等の先行研究に述べられている。

「開母廟石闕銘」は夏王朝二代帝啓の母の化身である石を祀る祠廟に立てられた石闕である。本来「啓母」とすべき所を、前漢六代皇帝の景帝の諱である「啓」字を避け「開母」と改めた例であり、古来より漢代石刻資料内に見られる避諱の用例として有名である。

上述の避諱の目的を鑑みれば、「開母」と名称を改めることは、開母廟石闕銘と関係する某帝かの階級制度の確立や保持、或いは某帝かの持つ権力の強化を目的としてなされたものであると言える。については漢代の避諱規定と啓母石祭祀の概要、また当時の社会状況等を参照し、「開母」と改称したのは「某帝が画策したことであるか」、更に「避諱によって顕現される目的は如何にして達成されるのか」について考察する。

考察の結果、以下二説を提示する。一つは「啓母石祭祀を開始した前漢武帝」が画策し、「啓母石祭祀の祭祀としての正当性の保持」により目的は達成されるといふ説。今一つは「開母廟石闕銘立碑時の皇帝たる後漢安帝」が画策し、「旱災に対する済民政策として、漢皇帝として行う請雨の祭祀という民に対する篤行を顕すこと」により目的は達成されるという説である。

この二説について、それぞれに論拠及び批判材料を提示しながら検討し、結論を導くことを本発表の目的とする。

(保善高等学校)

⑦法帖画像アーカイブを研究資源として活用するために

成田健太郎・中村寛

法帖（本発表では主に刻拓本の集帖をいう）の研究において、版の異同を検討し、その系統を詳らかにすることは肝要であるが、法帖は各地の所蔵機関に收藏され、異なる本を直接比較対照する研究は従来容易でなかった。

ところが昨今、ウェブ上のデータアーカイブにおける古典籍デジタル画像の公開事例が増えており、そのなかには法帖の画像も含まれている。今後ウェブ上において、ますます多くの法帖画像が利用可能になり、またそれにより法帖を画像ベースで比較対照するための資源が蓄積されることが期待できよう。

画像データの利用は、実物の閲覧に取って代わりうるものではないが、研究資源を適切に整理し組み合わせれば、研究方法として豊かに発展する余地がある。本発表では、そのような発展を実現するためには、アーカイブされた画像データの集合をどのように取り扱えばよいか、現在利用可能な技術によって書道史研究にどのように裨益することができるか、以下の三つの具体的手法とその可能性を検討する。

① 作品の典拠コントロール 各法帖に収録され版を異にする作品に対して識別子を付与し、典拠データを得る。そしてこの異版作品識別子を異なる個別資料の当該画像に付与することで、同一作品の異なる個別資料における再現例を一律に検出することが可能になる。

② 作品範囲の指定 法帖画像中の各作品の範囲を確定し、その位置情報に識別子を付与して、この識別子を①の異版作品識別子に結びつける。これにより、各作品についてその範囲を特定した画像を提供することが可能になる。

③ 画像処理による異版参照 任意の文字列を範囲選択し、他資料中の一致する部分を画像処理技術によって検出する。これにより、画像にテキスト情報を加えることなく、異なる法帖に収録された同一作品の異版を検出することが可能になる。

(埼玉大学・東京大学)

第29回（'18）書学書道史学会大会

M E M O

A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page below the title.